和朝

今昔物語

（藤合）

巻十五

[illegible]

十五

今昔物語 倭部 十五目録

○怪異傳

一 加賀國人渡猫嶋助大蛇討蜈蚣語
二 播磨國印南野妖怪語
三 以人為馬語
四 佐渡國人為風被吹寄不知嶋語
五 能登國鬼寢屋嶋語
六 習外法田語
七 狐為女童乗馬語
八 過鈴鹿山人宿[illegible]星語

六 越後国被打寄小船語
十 狐化杉木被射殺語
十一 飛騨国男退治邪神語

今昔物語 倭部 十五

○性異傳

一 加賀国人渡猫鳴助大蛇討蜈蚣語

今は昔。加賀国に住ける者。七人常に海に出。釣を好
を業として年月を経けるぞ。そのころハ海賊の[illegible]
有ければ。皆弓矢兵杖を持たりける。あるとき
七人一船に乗て。沖に漕出しける程に。俄に[illegible]
風吹来て。いづくとも知らず吹ゆく程に。大きなる
[illegible]よせけり ひとびと[illegible]の人[illegible]
[illegible]

待ゐたりけるところ、［illegible］男ども
さしげなるありて来る。其主（ぬし）に［illegible］
ちかくは、ちりぢりやといふ。翁人（おうじん）どもすぐさて、我くは
今朝頃より出てさらしみ、さらひうけずる風よくなるさ程く
そぞうよふうちに、此翁をみつまそぞよろこびあひけるが、
ある待る処と、前の男いふく、其大風に数ふるやうなる
ほぞ飢（う）ゑなるべし。其物おもれし、己（おの）が来りつる方よ
りくひくよけれバ、かまでず家人と見て、長櫃（びつ）二荷（か）
ひ来り、酒瓶（かめ）をもおもれる。櫃をひらきされバ
微妙（びめう）の食物なり。取いだしてくひしむるに、翁人ども

経日（へるひ）飢（うゑ）けるまゝなれバ、皆よくくらひて、酒のみて、残れる物と
バ明日の料（れう）にとて、長櫃（びつ）によろしくかへさいれて置ぬ。此荷（か）
もてる者どもは帰（かへ）り去（さ）りぬ。そのゝちまた此男追てくるなり。
今日其達（たち）を送りはべる。ゆく人ハ、是より奥（おく）の方に渡りて、
ま翁の主我を殺して、此鴻と領をかへとて、ぼくハ
来て我よりて米年なり。明日来て残りてまたぞ。
我が人よ出すると思ひなるさまれバ、其か為めにて世へ
かくてと遂へけるなりといふ。翁人ども、いとく鈍よ
頭ぜざりなきならばし。かく言のうる［illegible］谷まで
つ［illegible］神手よ［illegible］

[illegible]身にて耻何なる[illegible]
男子にて候ひしが。歌も我も人の體にあらねど[illegible]
彼まく浮まかくらんとしに。我は山よりおりまたしが。我
我は負るく堪がたくは。其逢に月かえん合まとべし。其
乃ち家のあかんがきり射る鳴るべし。此の所より相従ひし
て。年時許に我にべきあるすぢいへく。奥の方に入りぬ
人たは其弟なるによりて。本かん伐て菴を造り。巌となる
く銃弓の弦をはなし。其夜は火を焼て物語るなど
して居たるに。此時りなりんところ。歌乃末を人とはい
ふかんなりけれ。風ふきて吹出し。海の面まつほうて

ありて。おそろしく物すごくかんありける所に。たちまち光る
中より。ふしぎにして。其中より大なる火二つ出来たり。又我
居たる所の木の中よりかけれど山の方の井戸あるく成て。
常まなびさけくだるかりより。又火二つ出来る。
須の方より来る物なれば。蟒蛇の十丈許ある
たよひだ来たり。二つの火とみえしは雙眼なりけり。上より下る
物なれば。すまだるの大蛇なり。二つの火と見えし
は是も雙眼なり。相迎ひかくそへひかみひしくと喰合
ありふ。そうて血流るるは如くなる。二つのかい合て。そ
乃ひかりて體[illegible]
[illegible]

よき如するにして[illegible]といふ者[illegible]

まれて頭より尾まで鱗あるかぶり射立てあれを

接く蜈蚣が手に切るまでは倒をねずらず大蛇は[illegible]

ころされて言入しかば。猶人々もいよく蜈蚣を切ころ

して。此の本紙伐りきてこれを焼。其の原学紙は存く

捨ざりざりのちよろしくおそ。件の男部より血流さ

られずら。此地わしをふふてうちかまくいくまれ

其の蓬の清徳よふしく。年来の讐敵とおろかしぬ。

その所にざしつまれがてし。此時よ田畠よ及べ年ば不

さいわく多く行末牧をまつば。魚鳥林くしまふ

ふれて来よ多るあるも。此嶋よ来りて住なんといふ。猶

人々もいとまてしき事よは候れども。妻子をばいかゞ

住るべきといへば。男それをばむかへてこそ来るらしといふ。

猶人々いかにして渡るべきと尋るに。男のいふに渡る

には此方の風紙ふきよくわたりぬべし。それより先に

まゐらば加賀國熊田宮（延喜式神名帳曰加賀國能美郡。熊田神社）とまうす

まば此方にまゐりくおはして。道の指合よべきまの

船しく入させて漕出しければ。嶋よりおくりに風まく

猶まく出来れくりぬる。七人の者。己が家にかへりぬ。

其後の従類相具して[illegible]

諸人集りをりけるに…
来て七艘の船ども件の嶋に着たりけるに。七八日
其嶋に居て。田畠を作りて居たりける人多
く成て今にありけり。其嶋の名を猫嶋といふ。其嶋
の人年に一度加賀国に渡りて。熊田宮を祭るなり
けり。夜半に船に乗て渡りゆく。帰る所をしりて。郷の
者ども其嶋に隠して見るなり。其祭。毎年のことなれども今
に知りせざるなり。其嶋は能登国羽咋(此二字補之)郡に。大宮
(當作大海)といふ所より。晴たる日見ゆ。中まではいかずとぞ。
南なる所に青くわりて見ゆる也。去比能登国の常光

といふ梶取風に放たれて彼嶋に着たりける。嶋の者
ども来て迎へしけるに。其後に船つくろひせさせて。食
物などくれて七八日許ありしに。嶋の方より風吹ければ
走りて船に帰りて能登国に着にけり。彼梶取の
者しは船の人ありける。其嶋には人の家多く作
りて。京のやうに小路とぞ有りける。人の行か
ふ事限りなくぞありける。近来もなかりけり。唐
人は先づ其嶋によりてぞ食物などをも求め。鮑魚など
を取り。其嶋より敦賀に出てぞ来りけるとかや語り伝へたる也

二 播磨国印南野…

今はむかし西国より…
てよりけるが。播磨国印南野にいたりて日くれ行ぬ
宿かるべき所もなけれバ山田守賤の小さき庵の有
と見付て。今夜ばかりハとてわらをしきて這入て
やすみ居けり。夜ふくる程にかの野の中ハ西の方より
金うちならし念仏して来る音に。男あまたして来るが
ともし火ともしたれバ。おほくの人火をともしつれて僧ども有
同じくそ念仏を唱へて来る。葬送なるとみえて。皆
くあれバ此男が居たる庵より二三段ばかり去て。死
人の棺をおきて葬送と埋る下部ども多く

来て。墓を築きて。其上に卒都婆を立て。各かへりぬ。男
おそろしさかぎりなし。墓乃方を見やりたれバ。此墓うごく。棺
のうへ也。鍬用してはらひてよくきれバ。ちかよりにうちれバ
土をはらひてけがらはしき者出づ。火をともしてあがりて。身に付たる土を
ちらしはらひて。庵にむかいて来りしかバ。此男思ひける
ハ葬送乃所にハ必ず鬼あり。其鬼の我をくらはんとて
来るにこそ。此庵ハせまけれバいづれへかくれんや
おもひて。刀をぬきてこそ待居たりけれ。彼鬼来りて
庵に入らんとするを。抜たる刀にて切さしれバ
あふのきさまに… 男ハ… そのまゝ…

ありけるが持て遠く行[illegible]
行て。人家の門脇にかゞまり。焼くを煩ひ。其郷に
人にあひて。ありしくれ東おろしとかたれバ。郷の人いはく
行くえんとて。男のさふらふそく行られ。お葬送
せし所にハ墓も卒都婆もなくして。大なる糠を切
くみて置たり。此糠の男が庵に置たるなど
いひしてきこし給ふるのなれど。結縁へたる也

三　以人為馬語

今ハむかし。仏道をおこなふ僧三人。四国の辺をめぐりける
が。道にふみ迷ひて。深山に入て。さ海にの経よりける
ありけて人家に行て見れバ。恨げに出て其家に立寄て物を乞
さんとしいへバ。屋の内より立出て向ひ出ハ。修行仕る者共
乃道に迷ひ遠く来る也。道に教へ給へといへバ。内より主
六十斗の僧てわかく入給へとて。三人ながら板敷の上に
呼のぼせ。飯などくはせて後に。主あるけれバ。お中しだる
ある法師来りしに。例の物もち来れといへバ。鉛と鐺
を取て来たり。又此法師例の物よせよといへバ。一人の
修行者を板敷より庭に引おろして。鉛をもつて
四五十打くくれられぬ。其後に馬となりて
[illegible]

二人の修行者ふぎんとするに。道わかれ
處をみて一人を左よりまはらんが為ぞ今一人ハ右
修行者。其身をまもる戒をたもちけるとも。心中に
念じけるハ。佛の御加護にてやありけん。其の後。其
修行者とハ先そのまゝにて指出ていひて來る道
なるハ法師と呼ぐすしろの田に水ハあるやみえけ
いへバ修行者。修行者といひけるハ家に帰りてもかげ
出ても同じくころさるべし。千にひとつものがれうるも
こそあらめ。若よ入なバふぎんといひて舌をまはるハ
思ひかく又六町ハあるらんといふに。その家ありけるの

若き女一人立ていたりしが。いひけるハ。なにとて向ハ。修行者あら
くの事をいへバ。身をなげても死んとて此ろの住なり
たまひけさせ給へといひけれバ。げにまちかねるよしあらんといひけるも
りて為とけよかりしを。何ぞハ甚れいつる浄房
の大むすめなり。是より下に見しがうつらの姉とる見てさん
うき給ふのミて為とけ申べし。是よりおぞとてそこく
れなしまゐせ。消息給はらんといひて。書てとらせて
いはく。二人の修行者きたらバ馬にのせて。うちハ老たよ
うづかくころさんとする道の田に水やあるへきにうきを
なりけるでわらんがいかでか [?]。さてハ [?]

いへバ修行者清水と[illegible]念仏
称してそのまゝおもむく。はや京へ廿町ばかり行バ山の
うちに家あり。之よりて人をよべバ出て清水をもてなさん
とてけるをバ取次の人内へ入て帰てこれへ入へ
といへバ修行者入れバ。女房出て対面していとく婦が
かくのごとくなれバ念仏をとけよべし。但し宮女
には抄そのしき事あり。ぞつく宮にかくれてれ
ちかせよとて。一間なる所にかくしおくて宮しむる
たとへバ修行者何事ならんとおそろしくて
音もせずしてかくれ居たりけるが。ややありて飛[illegible]

ども抄そうしける者入来て。何あぐされ外にゆへ
家よ帰らざりし。かくて彼者女房と物語してありけるに
時過て帰りぬ。かくて後女房行べき道なれバ案内あ
申さん。今夜ひそかなる人なく行とおがしめせさ
いへバ修行者喜びて泣く称して。藪の[illegible]まぎれ
ゆくに暁がたになれバ。今ハ百町ばかりは来りぬらんと
思ひけるに。例の大路に出たり。それより人里を
尋ねて人家に入て。あるくれるの事をもかたりしに語るれバ。
聞人おそろしき事かな。[illegible]修行者ハ京に上りて。二人
乃僧がさめに岩根[illegible]

といふ所にさしかゝりしに……きあ
ありし修行者の正しく語りしと聞て。かくかくは
しるしおきたり

四　佐渡国人為風被吹寄不知嶋語

今は昔。佐渡国の者あまた一船に乗て。海をわたり
るに澳中にて俄に南風来て北の方に吹やりき
まゝ船の者ども今は浪にとられて艪をとり上ぬ
風に随ひてやく行程に。一つの嶋に吹つけられぬ
嶋より人出来り。男にても女にても童にても頭
を白き絹にてつゝみたり。長きはいと高く。お

そろしげ成るが出て来たりて。いかなる人ぞ寄
来れると問。船の人答へて。我等は佐渡国の人なる
が俄に悪風に値て。思ひもかけず此嶋に吹よせられた
り。嶋の人いはく。ゆめゆめ此地に船をよせられの
がるゝ者は。おのれが食物なければ。あくまでくはせよ
て入ぬ。さればすでに同じやうなる大男十人ばかり来
れり。船の人どもこれを見て。是は鬼にこそあるらめ。
彼等が體を見るに。其力量はいかばかりならんは
せんと思ひて。かゝる嶋の者ども寄来て……
あるべからずとて……

これをとらくさげしわらがのはな一郎かゆりかなる
甚みなりし中国よ帰ゆくべしといふぞ。不動といふ
と。羊頭（てづら）を糸おまくらふ也。不動といふものは。羊
頭よりへきりうく太たり。此稿もそれは二色と合わ
せてあるたりとぞいふ。是分さすよ。鬼よいあ
らんして。神すでにやありきん。されども同じ
うりたれども。長（たけ）のあるれは似ざりたり。此事はいて追
き事なり。佐渡国よりおるりかりもちうかもて。諸
はらへさるとも也

五　能登国（のとの）鬼寝屋（おにのねや）嶋（しまの）語

今昔。能登国の奥に鬼寝屋といふ島あり。其島は
河原の石のやうに。鮑おほかりけり。其国に光浦といふ
浦もあり。其浦にすむ海人ハ。鬼寝屋にわたりて。鮑を
とりて国司に年貢にしけり。光浦より鬼寝屋へは。船行
一日一夜なり。又其ほとりに猫島といふ島あり。鬼寝
屋より猫島へは一日一夜の渡海なり。されども猫
島へハ人ゆかざりけり。光浦の海人。鬼寝屋に渡り
て帰りぬれば。鮑一万を国司にまゐらせける。四五十人一度
にわたりし間。其鮑のおほかるといふばかりなし。さる程に
藤原通宗朝臣。能登守の任はてける年。光浦の海
人ども鬼寝屋に渡り帰て。国司に鮑奉りけるに。其時
てなかりければ。海人ども越後国に帰渡りければ。光
浦に人なくなりて。鬼寝屋にわたりて鮑取ても絶に
けり。一度にせめとらんとしけるゆゑに。後には
一つもえとらずなりにけるとぞ。語伝へたるとや

六　習外術男語

今昔。京に外術好くはづる下衆法師有。
隣なり居る男。此事を習んといひければ法師
がいはく。たやすくならふる事にあらず
といひけれども。ひたすら男のならはんといひければ

けまいば。七日堂に籠りて精進させて法師にかへりけり。先づ一寸
しかるを行よ。已の剃(そり)て見れば。かくのごとくよく似たり。
それる僧坊ありけるに。内より障子(しやうじ)を引あけて見
出る人あり。男にて長き刀を僧の。さしたる
ありければ法師さもやはと人々怪しみ。男なりければ
とくば。これをよくよく見れば。男業道(しごくだう)の利(かり)に居たれば。
又僧其男の如くこころみ刀(かたな)にてさしけるぞ。されど又
ば若僧未だ男がこころをはじめんとすれば
これにてころしたる刀を抜(ぬき)飛(とび)かかれば。老僧
これとたちの(?)これより見れば坊主にし。おそろしく[illegible]

いくみゆるをば。ひろくとも狭がえて大きなる堂の間
にありし導寺(こうぢやうじ)の僧に抱(いだか)れて。すずろにありつる
まゐれとて。あれましよ。色をとらずみて見えさせばかる
りふ未だとともにいふども。一条とにし西洞院とにあり
ける。大峰といふ寺に来りてありけり。如く外法のふ
しぎなる事は聞てありけるとぞ語り伝へたるとや

七　狐為女童乗馬尻語

今昔。仁和寺の東高陽(かうや)川のほとりに。夕暮方にわかれ
は女童こそ立て居て。京の方へ通る人あれば。其馬尻(しり)に
のせ[illegible]ゆくべし[illegible]のせんといへば[illegible]

脇ハおりて積ミかくしおきたるのち、さらにまた
滝口が陣に滝口ども集りて、かの高陽川の女童が
ことをいひ出しけるに、かの滝口はすゝみ出て、我は其
女童をかならずとらへてみすべし。人のはなしてみづからは
といへば、滝口どもいやとよといへば、明夜なれど
かくかくいはさ来んと約して、其翌晩に乃くだりの滝
口馬にのりて高陽川に行て、湯の小女童を見たれば、
引返して京の方へ来るに、女童ありて、其馬の尻に
乗せてといへば、滝口はいづくへゆくぞと問に、京へ
行るが、日の暮ぬれば、馬の尻に乗せて行けるに、

かくよなりといへば、やすき事なりとて馬に乗せて、かね
て用意しける指縄（さしなわ）をもつて、女童が腰を鞍にゆひつけ
京へ行程に日くれけり。一条の東より行て、西大宮の辺にて
見れば、東よりひかりてくるものありけるを見てぞ、車ども行けれど
て来れば、滝口かくて西大宮より二条へゆきて、
二条より東に行。東の大宮より土御門まで行ほどに、土御門
の内にて帰りくといひつけば、従者どもやがて向ひ
皆作りて十人ばかり出て、付女童にゆひつけたる指縄
とき、門より入てあけさせて、本家
…ひあはれば…とて…

かれハ哭く〳〵も[illegible]なれバなすと蓑を被て
なほ[illegible]ろく雨漆く途すがら滝口が立る。従者もしばし
けるゆゑに失て火も消て暗くなりぬ。今ハ是非なくて
みなかへれよ。鳥部野の中に立居より。翁大宮より
めぐりてかひハ家に来れるなり。一条にて火をとぼし
てかひつるハ。猫のわざなりとこそ思ひたり。さりとて
有べき事にあらず。探ば敵手ならず小家に帰てかひ
なるゆゑにげにがろく成れバ。今夜ハ猫よりおどしお
をば途さへ都をそ。従者あまた具して馬に乗そ
高陽川より行てわたらふ。川あるに女の童さら[illegible]

馬の尻にのりたりけるを。のきて前の女らに指縄をもつて
はよくゆひつけて。一条を帰りくるにくらければ後の従者に
火ともさせよとそこそ行よ。一人もあまたあらぬ。
土御門にて馬より下て。髪をとらへて東へ行て滝口
どもにかきを有ける此女ハ強く縛てひろくされバ。暗く
こゝへそて有ければ。せめかられ猫になりてうせぬ。
続松の火をもて毛を燒て。蟇目をもつて猫を
射ければ。ふるき猫のわざなりけるをしらせて。ころびて
あまたこれハえあやまちなくしばし逃く去り
こ[illegible]し[illegible]ところ[illegible]悦[illegible]

八　鈴鹿山人宿不知堂之話

今はむかし伊勢国より近江国へ越ける。かの男三人ありしが鈴鹿山にかゝるに、その山中に鬼の住といふ所あり。人の宿をかす旧堂あり。彼三人の男夕立にあひて此堂に入て宿りぬ。此鬼の住と聞しが定て狐狸なるべしと思ひて居けるに、二人の男がいふ、昼通りし山中に死したる男あり。其死骸をそのまゝ中に[illegible]一人の者いひけるは[illegible]

ありて出行ぬ。今一人の男も又裸にてさはりかね[illegible]ぐるくと死人を見て、谷へ捨、其後に臥て居たる外の男共、死人のかはりに臥たる男が頭へとするが、頭たる男、頭たる男の肩をおさへてひくれ、くちおし死人とて捨負てかへりて堂の戸ひらき[illegible]あげ捨て[illegible]の[illegible]に負てかへると[illegible]堂の内へ入たる間に、負たる男へあげ[illegible]て堂より出てみれば死人なし。早く逃たる奴がれて[illegible]負たる男[illegible]語り[illegible]

おそろしき事なり　　　　　　　　　　ありけり
さる所の商人なるハ大仏を信じけり此七人の井とぞ
出しけるに向ふ堂の天井の節の穴より　板を
の節ども抜けておちけれども此男ハ驚もせ
ざりけり是ハ狐狸などの所為にこそあらめ去ほど
に人の悪くいひ伝へけるにや堂に一人臥りける
男の魂もおどろかざりけり夜明けれバ出て近辺の
方々にかたりけるよし語伝へけるとなり

九　越後国被寄小舩語

今ハ昔源行任朝臣（子　高雅）越後守にてありし

ありける時越後国（字欠）。。郡の浜に小さき船のよせられ
広さ二尺五寸ばかり深さ二寸長さ一丈ばかりなるが流れ
よりたる人々かゝる者のいかなるにかと思て浜にうかみ
寄るかくれのよくみれバ舷に梶緒の筋ある
ありけれバ人の乗たる船なり此何なる小人の
乗たる船なるらん漕たるにハ蛇蝎のやうに
こまかなる物の世にめづらしき物なりとて館に持行
しかば守もいみじくあやしがりけり年老たる者の
いひけるハ昔もかくのごとき小船よせらるゝことの
ありけりなどいひて……此小船によりの

突とほしたるは思ひもよらず
弟にのがれたる時。即死とぞなりける。不思議の事なれ
かくたくみたりけるなり

十 杣化杉本被射殺語

今はむかし。春日の宮司中臣某が時よ。中大夫といふ者あり。
奈良の京の南。三條といふ所に住居けるが。ある日
の間ありて。從者一人を具して。山録（やまぐい）へ出たりけり。
東への方へ行く二三十町ゆきたりければ。日もくれて杣よへ
なる日ごろあるとも見えぬ木の大さ二間く
ありて長さは二十丈もあらんとおもゆ。[illegible]一反だにも

されば此から中大夫從者弓をもち鐵柄よ[illegible]
まで此ひおもふ方に来わたりや向ひてそこを杣
木は此の周は見ゆるやうにといへば。見て作く者
あるが此の僻目（ひがめ）よりおもて迷神（まよはしがみ）に手づから杣く
此ひとをさるに来たりてこそ。此大木ありていど
うで見んとるやう向ひければ。從者も此おし待ちたりて
中大夫されば此すでに寄よりてあるに木に
たりつげらるらんといへば。從者の男此杉本に寄（や）
を射ぞて立る。射ければ絶んせずといへば。中大夫け
[illegible]

[illegible]

ぬゑまさてこれ物よわしきかしらるんと

いひしが近所ゟ聖翁に従行てみれば毛のそけ

しるむ術の杉村枝とくゝりさゞら脛ゟ矢を三筋射

させて狩て死居ゟりけるとなり語伝へるとかや也

十一　飛騨国男退治邪神語

今はむかし修行者脚の僧飛騨国まで行しが道に

踏迷ひて深き山中に入りゆくさまたどりければ

もあらで大なる滝のさぶれとりける所に落ちる

いかゞせんとおもひめぐらすを物音しける

男の笠に丸あつきてかくる方より来ければ僧は男に

と向かひとぞいて待ところに程なく来りしに男

向ひ此男あ中きなる風情にて其返辞をいはざる

の中に飛入て失ぬ僧ははじめて是は人にはあら

鬼よりそ此もあまく鬼ゟ咋されんよりは滝に

身を入なんと不敵に思ひ切り滝の中へ飛入

されば面ゟ水がそゝぎかけて滝を通りすぎ

立帰て見れば滝は只一すじに簾をかけたる

ごとくにて滝より内に道有て通りゆきければ

さてかの人里ありて家ども[illegible]

[illegible]

下ざまの者がおほく侍れどもそれとてびんぷん侍るを
髪をとりかへる也。蓑笠菓子なども脱てよろこびを見
たる合物をおくらる男がいへくば衣はいて女のまゝ
世男たりとするもがくゆるふわ世上をば掌にめ
一人のむすめありがきまれありとて我家とはげせよ
べき聞。今日よりは髪をも生しおいて女の衣を着
わのぞくつとめをすべきといふ。僧いとやすく数々
もせんとたてへば、今よりは身もの佳りんまことにおく
らめて、わり烏帽子出してくるゝあひだ、衣をものますく

そりかへて物をつくりたるの女かがつけたりけれは
羅たりけるに将装束をとり出して。夫妻の織紙をか
さしめぐりかへて月日をすぐれば間に髪もよはよ
烏帽子をさえる清気よりは男たりてよ也。衣
合ほにはゆりそて夫妻もりまくてありけるを雅よ。
八月たりけるにぬかれる。かれて木には妻のみじく物を
家すぐこたりければうちとれこよろこぶさめぐし泣
くれしかりまいらくちいて身ものきもがどの
こゝろかぞくかぞかゆるにけりのびいぢいひあつしたりかがし

[illegible]

稼ハかでるとと程よかる日客人来り家主に會
物がたりすがら三男ハ客人にむかひてぞわれも
うきおん人を得るにぞひとつのはなしをもかくしさんま
そのうちしくかゞをするんとなんバ家主甚笑れける候
人を得どもハ道にハいつもうかうれんとゑがおの事
乃今此ハいつもなんしやうせんなどゝむかし語りて帰
りれバ家主も門より入まつて此間妻がうけさせし
今日の客が云事に是より会得せざるにハ此郷の
者ども事にさめしげに膳なぞとそめくてありけ
さつけ。妻がけれバ月あたか……へ

よしなくしてハ泣に気のつかぬうちにおもひかへし
然ればよもやそのへんにしてくれぬとひとつのこゝろにかくし
おもふ事をうち明けもせて只泣くにまかせれば妻もいら
涙ていかにもかゝれどはじめの様んむかれども只見
えんとの今はいくばくもある間じかればかくしやうもなく
なりゆくんとのくるしきありさまにいまさらなに泣るれば
おとこそれハ我死べき事のわりもやせ我ハ人のまぬかれ
ざる道なればくるしかるべき事にもあらねどぞなきのち
まんのこる身とひとり妻子かなしびおもさんとて心乱
住べきたより人を生贄に今すつる身の一人

ばくの人を一家より父と出ればかくりもとめ給はざりし
我子なれども是非なし御身の行衛こそいと心もとなけれ我こそハ生贄と
夫ハいかゞりまうて出るべしといひそえあげれば夫の
神ハいかなる神ぞ生贄とハいかにして備ふると問
妻ハいふ其神ハ猿のくらゐにおそろしき物なり
生贄をとバおそろしれむかで爼の上にねせて瑞籬の内
へ人去りぬれバ神のはしりてきりくらふと
なりし生贄ハ我より先に刀をもとめて持せよ
もうつ妻刀をもちてかの刀とよくしをぬ
[illegible]

〔…〕精進潔斎なくてはかなふまじとて其日は〔…〕
汝男に沐浴させ。髪けづらせ浄衣きせて。男をしたが
へて山にのぼりける。男ゆきつきて見れば山の中に大き
なる宝倉あり。楼閣をもつて広く作りける。男はおそるおそる
して俎のまへ仰向にふしぬ。俎の四の角に榊をたて注し
進本縄をかきて楼閣の内に入て戸を閉て帰りぬ。
男は足をのべる膝の中にかくしおける刀はなさ
ず。夜半ばかりに卯の方より一の祠
の戸をひらきてありければ。次々の宝倉の戸を
次第にひらきぬ。廿疋ばかりの猿どもくはゝり来て。

一の宝倉に向ひてかしこまりぬ。一の宝倉の簾をあけ
ければ出る者を見れば。是も猿なれども長大く
歯は銀のやうにありけるが出て。そのほかの猿ども皆
来て並居たり。一宝倉の猿何やらんいひければ。一の宝
の猿男が前なる俎にむかひて。かの生
贄男をしばしとながめ。膝によりそひたる刀をとりて。一宝倉の
猿をおしふせて。おのれや神といはゞ猿は拐て居
けり。其余の猿は一疋ものこらず逃去て。木にのぼりて
〔…〕男かくてゐる猿は引ふせ。此猿は声をあげて
〔…〕神は〔…〕

さして年ふる人々ゆへいよ〳〵はやく一二三を
ちうまらに猿共をおきされば家もしてんとふ
刀とひやくし服にあつまれば猿をたさけいて見共おる
伊丹んがちかけば二三の浮子さらに猿来りぬ我を
きうんとくけ多る猿共をあせてくへば見がわれて其猿
来りぬ其の猿をとりて蔦共わきてあ集あ二三の
浮子とりて其猿をとらへて猿よゆへつきはさらぬ人に
合物恐る火の猿つく当る共あて宝金もとに
付けるをば一時に焼失ぬ此火のひろきと郷の者
まゆえくわする事ぞとおもひさらぬしうにありけり

しかり此家の主ハ八十にあまりて
倒れハ出る人なかりきかうかりけるにせ勢ひ
猿ハ四足をかゝめくされバ退きて其身ハ裸にて髪を
乱し荒縄にて片手に刀をもち片手に荒縄
をひつさけ郷より來りし家々の門をのぞきたまへハ
家々の者これをみてかの生贄の人の彼子をさらひ
縛りなば退て來けるハ神とも彼とりて人に
神をたのみまつるハ我みずハ敵殺しやまぬなど
いつくるしひ居たりけれ生贄の男舅が家に到て門を
あけよとさけびけれども答へなければ音をたて

おきよおけどハ何かんしらひたく足をおきて門を
蹴たれバ舅むすめを伴ひて是ハ神にも度さりける
人なり我等ハおそしとや母なかりせむ。和君門を開
てまへらさよりつ妻かなりにぐらく物しく我
まいて門を細目にあきたりけるに母いそぎのく妻に
直ハ装束みな揃させよといへバ狩衣袴烏帽子など
みなしるした。猿を我家の物をつくりけうまでて
うりわして装束して狩衣紋のかすみけるに紙をさせ
て是を肩にて舅に向ていひてかれを神とらいて
年へてとかくやうすみ

丸といひそこの者にはくなる大切へのかをかき
ど源をのせかるゝものよ生さる人を備へしハ、さきは
て押ろうたりし殺して我んとぞりハ帰ら世てうんてき
ようて猿が耳をいうてはかべ、今で居たる伴押りさ
絶ぞヒ、舅せ人よハ志てさびひさる老んにてそくそのを
志てうんれて、我等こそりしる家業用ぬ志てぞ、ておく
まりはくのひぞさし、今まりねハ君を神とおもぞは
て身を捨させすべし。今で何事も你の仰にと
いひそよ然られバ、いざ猿人大領の許ふていひそ舅
を相具し猿どもぬ前よ進立ちそ、門をわらよく

さけぞぞ是よひつかざれバ、舅かようてそぞさぞ聞て角く
おけ給いとハろくつくおゝきき事なるへしと押ぞせば。
大領門をひらきて生贄男なんとて、此上ハとさ
多居てぞ生贄男猿ども然家の内よ引つ連のて猿
向ていふく、おのれ毎年此神といふ虚名を附て毎年
人を食さる報よ、今ぞ射ころさんといひそぞ弓に矢
をはげいひて射んとされバ、猿ぢれさけびて拾す。
大領あれくれをうくれいひて、舅が許よろうて我
ぬハよや殺し給はんずさかんあもとせてさぞていへバ
[illegible]

かしこくやそのよしを申しければけんじやうに
いのちをたすけつる也これより後出しくれたりけれハ
きよまさ其庭にて射ころさんとしてけるを扶けて
二十あまりにて追ておとしけれバ人あやしみて其
後ハおそくぞありける此男其郷の長者の娘を妻
と具して子孫ひろく多くの人を進退し馬牛物など
多く領して飛弾の国にける所の大領となり
其国の人も其国の人もゆくへは知れたるとぞかたり
つたへたるとなり

今昔物語十五